HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	三巻本『枕草子』不審本文考（四）
Author(s)	後藤，康文
Citation	北海道大学文学研究院紀要，159，61(右)-81(右)
Issue Date	2019-12-27
DOI	https://doi.org/10.14943/bfhhs.159.r61
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/76543
Type	departmental bulletin paper
File Information	159_06_Goto.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

10.14943/bfhhs.159.r61

三巻本『枕草子』不審本文考（四）

後藤康文

十五

【本文】「文ことばなめき人こそ」の段

文ことばなめき人こそ、いとにくけれ。①世をなのめに書きながしたることばの②にくきこそ。さるまじき人のもとに、あまりかしこまりたるも、げにわろき事なり。③されど、わが得たらむはことわり、人のもとなるさへにくくこそあれ。

（第二百四十四段・三七五頁九行～一二行）

【三巻本諸注の解釈】

〔①について〕

×身のほどを思い上がつたように書き綴つてある／世間のしきたりを無視して。（『評釈』通釋／頭註）

×世間をいい加減に見て書きなぐった（『大系』頭注）

×世の中をあまくみて、書きなぐつた（『全講』文意）

×世の中を（そして相手の人を）軽く、あまく見たように書き流してある／▼なのめに　なおざり・いいかげんに考えること。相手を軽く、あまく見たように。（『旺文社文庫』現代語訳／脚注）

×世の中をちゃらんぽらんに考えていい加減に書き流した／世間をいいかげんに考えて。（『角川文庫』現代語訳／脚注）

×世間を小ばかにした風に書き流してる（『解環』口訳）

×世間のことを軽く考えたように。（『和泉古典叢書』頭注）

×世の中をいいかげんに扱って。世間というものへの謙虚さがないこと。（『新大系』脚注）

×世間をまるでないがしろにしたように書き流してある／世間をまともにではなく、いいかげんに思って書く、軽くあしらって細かい配慮を欠く、などの意か。（『新全集』現代語訳／頭注）

×世の中を軽く考えて（自分の思うがままに）書き捨てている（『全訳注』現代語訳）

〔②について〕

×どうも氣にくわないのである。（さりとて）　（『評釈』通釋）

×にくいのである。　（『大系』頭注）

×にくいのだ。／「にくきこそあれ」の意。　（『全講』文意／釈義）

×腹立たしいのである。／「にくきにこそあれ」を簡略に表現したもの。意味はいっそう強調される。

（『旺文社文庫』現代語訳／脚注）

×腹立たしいことといったら。　（『角川文庫』現代語訳）

×憎らしいんです。　（『解環』口訳）

×にくらしいのだ。　（『新全集』現代語訳）

×憎らしいこと。　（『全訳注』現代語訳）

〔③について〕

×しかし　（『評釈』通釋）

×しかし　（『全講』文意）

×しかし　（『旺文社文庫』現代語訳）

×けれども　（『角川文庫』現代語訳）

×だけど　（『解環』口訳）

×しかし　（『新全集』現代語訳）
×けれど　（『全訳注』現代語訳）

【批評】

〔①について〕

苦心惨憺たる各注釈書の訳文は、およそ「世をなのめに思ひ（たるやうに）て書きながしたる」という仮想本文に対応するもののようであるけれども、そもそもこの部分、何をいいたいのか不明瞭このうえない。手紙の書き手が人生を甘くみ、世間様を軽んじている傲岸不遜または愚昧な人物で、そうした不埒な処世態度がことばの選択にそのまま反映した走り書きとは、これいかに。かりに用語も書き様も乱暴粗雑な手紙であることを記述したいのであれば、頭の「世を」はない方がよほどわかりやすいであろうに。要するに、何ゆえ発信者の処世観にまで言及する必要があったのか、また、万一あったとしても、「なのめに」は下の「書きながしたる」を修飾する表現で、上の「世を」を受けていないのは明白である以上、現行の本文を従来のように解釈することは断じてできないということなのである。

〔②について〕

諸注「にくきこそ」で文が終止しているとみているが、はなはだ疑わしい。「「にくきこそあれ」の意」（『全講』）「「にくきにこそあれ」を簡略に表現したもの」（『旺文社文庫』）との説明もあるが、ならばむしろ、「にくきこそいとわろけれ」といった結びを想定するべきではなかろうか。それにしても、はじめに「文ことばなめき人こそ、いとにくけ

れ」と〝総論〟を述べたその次の文が、まるで焼き直しのように「にくきこそ（あれ）」で結ばれるという筆法は稚拙に過ぎ、違和感を禁じえない。

そこで思うに、このあたりの文章は、**a**「世をなのめに書きながしたることばのにくきこそ」と、**b**「さるまじき人のもとに、あまりかしこまりたるも」とが並列対置されるかたちで、「げにわろき事なり」に集約される構造になっているのではないだろうか。そして、そのように考えるならば、後述するとおり見通しの悪かった視界が豁然と開けてくるのである。

〔③について〕

「されど」が、逆接接続の機能を果たすことばであること自体はわかる。いうまでもない。「されど」なぜ、当該文脈においてこの語の前と後とが逆接の関係になるのか、わからないのはそこだ。いやはや、奇怪千万。ここな愚痴蒙昧の学徒には、この点がまったくもって理解できないのである。ついては、是非とも論理的解説をお願いしたいところなのだが、諸注まるで申し合わせたかのように黙して語ってくれない。いっさい注がないのだ。ということは、逆接接続を疑う方がおかしいのであって、「されど」の必然性はわざわざ紙幅を裂いて説明する必要もないくらいに自明なのだろうか。

そこで、参考に供する目的のもと、本節掲出本文全体の通釈例を任意に二つほど引用しておこう。波線部の連係に特にご注意いただきたい。

・手紙の文句の失礼な人は、ほんとうに腹立たしい。世の中をちゃらんぽらんに考えていい加減に書き流した文句

の腹立たしいことといったら。さほどうやまうべきでもない人の所に、度はずれてていねいな手紙をやるのも、それはたしかに不体裁なことだ。けれども、（敬意を欠いた手紙は）自分の受け取った場合は無論のこと、人の所に来たのまでも、腹立たしく思われる。（『角川文庫』現代語訳）

・手紙の言葉づかいに礼儀を弁えない人は、本当に不愉快だ。世の中を軽く考えて（自分の思うがままに）書き捨てている（時の）言葉づかいの憎らしいこと。それほどとも思われない人の許に、恐縮し過ぎた言葉を使うのも、なるほどよくないことだ。けれど、（ふさわしくない文面の手紙は）、私が受け取った場合は当然のこと、人が受け取った手紙までも、差し出した人に好意を持てない。（『全訳注』現代語訳）

【本文改訂案】

〔①について〕

現状では邪魔者でしかない「世を（乎）」は、おそらく「世に（耳・尓）」の誤写だろう。そう考えるならば、〝復元〟本文は、

◎世**に**なのめに書きながしたる

〔はなはだ乱雑に走り書きした〕

となり、すっきりする。「世に」は「はなはだ・実に・大変」といった程度の甚だしさを表す副詞。今これに該当すると思われる用例を、『源氏物語』中からいくつか採取してみると、

・あぢきなきすき心にまかせて、さるまじき名をも流し憂きものに思ひおかれはべりにしをなん、世にいとほしく

思ひたまふる。　（澪標巻／『新編日本古典文学全集』②・三二〇頁一行～三行）

・世にかしこき聖なりける、年七十ばかりにて、いまは終はりの行ひをせむとて籠りたるが　（薄雲巻／同・四四九頁六行～七行）

・世に忘れがたく悲しきことになむ思して　（玉鬘巻／同③・一一五頁一一行）

・御装束のことなども、めやすくもてなしたまはず、世にあやしううちあはぬさまにのみむつかりたまふを　（真木柱巻／同・六八頁二行～五行）

などがあり、『枕草子』「木の花は」の段の有名な文章中に現れる、

・梨の花、世にすさまじきものにして、近うもてなさず、はかなき文つけなどだにせず。　（『新編日本古典文学全集』・八七頁五行～七行）

も、「ものにして」とあるので「世間では」の意とみる別解が成り立つものの、十分に同じ用法と認め得る例といってよかろうか。

〔②について〕

【批評】欄で述べたように、**a**「世になのめに書きながしたることばのにくきこそ」と、**b**「さるまじき人のもとに、あまりかしこまりたるも」とは、「文ことばなめき」手紙の対照例として対置されているのであり、ともに「げにわろき事なり」の部分に並列の関係で係っていく、その文章構造をここでは見て取らねばなるまい。すると、傍線部本文中の係助詞「こそ」は、**b**の末尾と等しい係助詞「も」の誤りだと判定され、

◎にくき**も**

〔不快に感じるのも〕

に改訂するのが妥当な措置となる。なお、「も」が「こそ」に誤られた実例については、本連載（一）第「二」節の②でも確認した。

〔③について〕

ここで「されど」という逆接接続が不自然きわまりないことは、先にことさら引用しておいた注釈書の、非論理的訳文のあり方からも如実に知られよう。そうなのだ。むしろ、傍線部には順接の機能を果たすことばが用いられていなければならないのである。とすれば、「されど」の「ど」は、「は（者）」→「と（止）」の誤写であり、元来、

◎され**ば**

〔だから〕

であったことが確実となろう。接続助詞「ば」と「ど」のこうした機械的ミスによる交替は、実のところ割とよくある現象だといえる。手紙の文章が無礼な輩は不愉快千万。ことばがぞんざいなのも、逆に慇懃過ぎるのもともに最悪だ。だから、自分宛のはもちろんのこと、他人宛のまで、そういった手紙を見ると差出人に嫌気がさす、と清少納言は書いているはずなのだ。

ことのついでに、藪蛇を承知のうえで蛇足を加えるなら、主として高等学校などの教育現場において、順接の接続助詞「ば」が時折逆接の意になることがあるかのように説かれることがあるけれども、それは根本的に間違っている。

「ば」の担う役割はあくまで順接接続なのであって、この語が逆接としか解し得ない場合は、すべからく「ど」の誤写（「止」→「者」）だと考えなければならないのである。

【参考】

〔三巻本本文〕①異同ナシ②こそ（陽明宮勧天高富本中弥刈烏日内早宇古前河鈴京伊静）――こう（徳）③異同ナシ

〔能因本本文〕①異同ナシ②にくさこそ（学）（富）③異同ナシ

十六

【本文】「関白殿、二月二十一日に、法興院の」の段・1

宮、何事をおぼしめすらむ。ここらめでたき人々を据ゑ並めて御覧ずるこそは、うらやましけれ。一人わるきかたちなしや。これみな家々のむすめどもぞかし。あはれなり。ようかへりみてこそ、候はせたまはめ。

（第二百六十段・三九六頁一行～五行）

【三巻本諸注の解釈】

×一人わろきかたちなしや。／一人として不器量な人はいませんな。

（『評釈』本文／通釈）

北大文学研究院紀要

×一人わるきかたちなしや。（『大系』本文）
×一人、わろきかたちなしや。／一人としてぶきりようはありませんな。（『全講』本文／釈義）
×一人わろきかたちなしや。／一人としてみっともない器量の女房はいないではありませんか。（『旺文社文庫』本文／現代語訳）
×一人わるき容貌なしや。／一人としてみっともない顔かたちはないことよ。／能因本、前田本「わろき」。（『角川文庫』本文／現代語訳／脚注）
×ひとり、わるきかたちなしや。／誰一人、器量のまずいのはいないね。（『解環』本文／口訳）
×一人わるき容貌なしや。（『和泉古典叢書』本文）
×ひとりわるきかたちなしや。（『新大系』本文）
×一人たりとも劣った容姿の人はいないね。（『新全集』現代語訳）
×一人わるき容貌なしや。／一人として恵まれぬ容貌の持ち主はいないね。（『全訳注』本文／現代語訳）
×一人わるきかたちなしや。（『新編』本文）

【批評】

諸注「一人」を「一人として」の意に解して何ら疑問を抱いていない。けれども当時、「一人」という名詞にそうした強調の副詞的用法があったとは考えにくいのではあるまいか。確例の有無を精査してみなければ断定はできないが、胡散臭くて仕方ない。名詞「一人」が「なし」と呼応して「一人として」「誰一人」「一人たりとも」のごとき意

味になるためには、あるべき要素が欠けているとしか思われないのである。

【本文改訂案】

「一人わるき」＝「ひとりわるき」はもと「ひとわるき」で、「り（利）」と「わ（和）」の字体相似も手伝って衍字「り」が割り込んだ形態とみることもできようが、意味上馴染まずよくない。そうではなく、そもそも「一人も」＝「ひとりも」とあったものが、「利」と「毛」の草体酷似が原因で元来存在した「も」の字がいつしか脱落し、現本文の形に転化したと考えるのがよいであろう。これに従えば、傍線部本文の祖形は、

◎一人**も**わるきかたちなしや。

〔誰一人として器量が劣る女房はいないな。〕

だったことになる。実際の用例を任意に示せば、以下のごとし。「一人も（～なし）」はどうやら男性用語のようであり、人生の絶頂にある関白道隆のことば遣いとしていかにもふさわしい。

・この歌を、これかれあはれがれども、一人も返しせず。

（『土佐日記』／新編日本古典文学全集・二三頁四行～五行）

・谷に落ち入り、異山に逃げ隠れて、一人もなくなりぬ。

（『うつほ物語』俊蔭巻／新編日本古典文学全集①・八五頁一三行～一四行）

・大将に奉りたまはむとするに、殿上蔵人一人もなし。

（同祭の使巻／同・四五四頁五行～六行）

・今日ここに、この好き者ども一人もなき、さうざうしや。

（同／同・四六六頁五行～六行）

・ただ今ものせんとするを、男ども一人もなく、みなそこにものしにければなむ。
（同国譲下巻／同③・三七五頁三行～五行）

【参考】

〔三巻本本文〕異同ナシ

〔能因本本文〕ひとりわろき人なしや（学）（富）

十七

【本文】「関白殿、二月二十一日に、法興院の」の段・2

殿の御方より侍の者ども、下衆などあまた来て、花のもとに、ただ寄りに寄りて、引き倒し取りてみそかに行く。「『まだ暗からむに』とこそ仰せられつれ。明け過ぎにけり。ふびんなるわざかな。とくとく」と倒し取るに、いとをかし。「『言はば言はなむ』と、兼澄が事を思ひたるにや」とも、よき人ならば言はまほしけれど、「かの花盗むは誰ぞ。あしかめり」と言へば、いとど逃げて、引きもていぬ。
（第二百六十段・三九九頁一行～八行）

【三巻本諸注の解釈】

×「言はば言はなむ。」と、兼澄がことを思ひたるにやとも／「言はば言はなむ。」という、かねずみの歌でも思いだしたの、とでも／▼兼澄　源兼澄か。陸奥守信明男。（ママ）（『評釈』本文／通釋／頭註）

×「いはばいはなん」と、兼澄がことを思ひたるにや」とも／▼兼澄がことを思ひたるにや　兼澄の歌でも思い出したの？　兼澄は源氏。但しこの句に相当する兼澄の作は不明。（『大系』本文／頭注）

×「いはばいはなむ、と、かねずみがことを思ひたるにや」とも／「いはばいはなむというかねずみの歌でも思いだしたの?」とでも／▼いはばいはなむ　後撰集二春中、古今六帖六に、素性「山守はいはばいはなむ高砂の尾の上の桜折りてかざさむ」がある。「かねずみ」は源兼澄かと思われるが、これに相当する歌は不明。「いはなむ」の「なむ」は願望の意で、言つて欲しいの意。（『全講』本文／文意／釈義）

×「いはばいはなむ」と、かねずみがことを思ひたるにやとも／「いはばいはなむ」と、かねずみが詠んだことを思っているのであろうかと／『後撰集』春中・素性法師「山守はいはばいはなむ高砂の尾の上の桜折りてかざさむ」（『古今六帖』六にも所収）に似た歌が、源兼澄（光孝源氏、源信孝の子。加賀守。家集に『兼澄集』がある）の歌にあったのであろうか。あるいは別人のことであろうか。「いはばいはなむ」は、いうならいってくれ、の意。（『旺文社文庫』本文／現代語訳／脚注）

×「言はば言はなむ」と、兼澄がことを思ひたるにや、とも／「言はば言はなむ」（文句を言うなら勝手に言うがよい）と、兼澄の歌を下に踏まえてそんなことをするのかとでも／▼兼澄　源兼澄。光孝源氏、公忠の孫、信孝の子。従五位上、加賀守。兼澄集がある。兼澄の歌には該当するものはなく、あるいは作者の記憶違いか。

（『角川文庫』本文／現代語訳／脚注）

×いはばいはなむとか、ねずみが事を思ひたるにやとも／「『いはばいはなむ＝咎めるなら咎めなさい』（というところね）」とか、「鼠のまねでもしているのですか」とでも　（『解環』本文／口訳）

×「いはばいはなん」と、兼澄が言を思ひたるにや、とも／▼兼澄　源兼澄。元輔などとも親しい、同時代の歌人。ただし、兼澄にはここに適当する歌がない。この一句、はさみこみの文としても無理なところがあるので、作者の誤解というより、後人注記が本文化したものと考えられる。　（『和泉古典叢書』本文／頭注）

×いはばいはなんと、兼澄が事を思たるにや／▼兼澄　「かねずみ」には源兼澄（信孝の息）が擬せられるが、その詠に「言はば言はなむ」に該当するものが知られず、清少納言の誤認かとされる。　（『新大系』本文／脚注）

×「『言はば言はなむ』と、兼澄の歌のことを思ってこういうことをしているのか」とも／▼言はば言はなむ　「山守は言はば言はなむ高砂の尾上の桜折りてかざさむ」（後撰・春中　素性）によるか。「言はば言はなむ」は文句を言いたいのなら勝手に言うがいい、の意。▼兼澄　源兼澄か。公忠の孫、信孝の子。『兼澄集』がある。現在残っている歌の中には該当するものはないが、当時似た歌があったものか、あるいは前掲の『後撰集』「山守は」の歌のことで、作者を記憶ちがいしたかとも思われるが、素性を余人と誤るのも不自然な感じがする。注記の混入か。

（『新全集』現代語訳／頭注）

×「言はば言はなん」とか「鼠がことを思（ひ）たるにや」、とも／「『あなた方、何とでも言って下さい』と開き直ったりしているのね」とか、「鼠の仕種を思っているのね」とでも／▼とか鼠がこと　造花の桜の木を倒して引いて行くのを、鼠が物を引いて行くのに擬しての発想だろうと見る解環説による。

（『全訳注』本文／現代語訳／語釈）

×「言はば言はなむ」と、かねずみが事を思ひたるにや」とも／▼かねずみ　源兼澄。公忠孫、信孝男。安法法師の住む河原院等で元輔との交流があり（各家集）、金峰山にも同道した（一一六）。「言はば言はなん」が兼澄作との記憶違いか。一説、後人注記の本文化（増田）。／「兼澄がこと」が、素性の歌とは別に、「宵の間に君をし祈りおきつればまだ夜深くも思ほゆるかな」（兼澄集）を指し、まだ夜深いと思っているうちに出遅れたのだろうの意とする説（ほるぷ）がある。歌の言葉を全く引かず、名前だけで示したと見るのは難しいか。

（『新編』本文／脚注／補注）

【批評】

ここはどうやら、かなりの難解箇所であるらしい。ゆえに諸注こぞって逃げを打つ中、千万人といえどもわれ行かんの気概やよし、ひとり『解環』（追従するはわずかに『全訳注』のみ）は、

先ず、「言はば言はなむ」という引用句は、素性の古歌からの引用句として、この場合に完全に適合しているのであるから、兼澄の旧詠に、それ以上の適性を有するものが見出だされない限り、素性と兼澄とが、同時に考慮に容れられる余地はないという単純な論理からして、引歌の確実な素性を温存して兼澄を消去し、「かねずみかこと」という本文を「兼澄が言」と読む従来の句読法を、原点に立ち戻って考え直すべきであるというのが、筆者の新見の出発点であった。常々、平安時代の文章語としての「こと」に「事」の字を宛てる誤りを説き、「言」と読むべき場合が多いと主張するのが、筆者の持論ではあったが、この場合は、むしろ例外的に、三巻本・能因本

の「事」という表記を支持するのである。

さて対照法解釈の手続きとして、基礎的な語脈的規準の段階に立ち戻って、この本文個所を句読すると、

いはゞいはなむとか
鼠が事を思ひたるにやとも　（よき人ならば）いはまほしけれど

と、前後に対句を形成していることが知られる。その手がかりは、連語トカとトモとの相対的配置であり、そこに共通する格助詞トが、「よき人ならば」という挿入句を挿んで、共に「いはまほし」にかかるものであることが知られる。そこで、相手の教養次第で、和歌の風雅を解する者ならば、素性の古歌を引いて、

「言はば言はなむ」と言はまほしけれど、

となり、無教養な者ならば、その行動を率直に諷して、

「鼠が事を思ひたるにや」と言はまほしけれど

となると、清少納言が両様に考えて文章を構成したのであると認めたのが、**集成**の新見であった。上種・下種双方に対する発言の選択的予想が、「……とか……とも」という対句並列の文章表現であると文脈的規準よりして判断されるわけである。従って、（中略）ここに兼澄説の復活を認める余地は全くないのである。（問題点）

と主張し、「ねずみが事」については、

『続日本紀』宝亀六年四月己巳条に「河内摂津両国有レ鼠。食二五穀及草木一」同七月丁未条「下野国言、都賀郡有二黒鼠数百許一。食二草木之根一数十里所」とあり、『三代実録』元慶五年正月条に「是月諸衛陣多二恠異一（中略）左近衛府生佐伯安雄劔胡籙等緒有レ鼠嚙断而将去」とあるように、鼠の害は周知のところである。桜の造花を

引き倒してこそこそと持ち去る様子を鼠に喩えて、「鼠にでもなった気持ですか」ともひやかしたいところであったが、それも新参という立場上清少納言は差し控えて、一言も口出しをしなかったのである。（語釈）

と説明する。

まるで〝ぎなた読み〟を逆手に取ったかのごとき奇想天外な異見だが、まことに残念なことに、この見解がまともに取り合う必要のない妄説であるのことは明らか。「「よき人ならば」という挿入句」の主語を作者清少納言とするなど、当該文脈がまったく理解できておらず不合理かつ強引の極みだからだ。が、どうしてもこれを主張したいのならたとえば、「とも」は「とか」とではなく、

・さしあたりて、をかし　とも　あはれ　とも　心に入らむ人の、頼もしげなき疑ひあらむこそ大事なるべけれ

（『源氏物語』帚木巻／新編日本古典文学全集①・六八頁七行～八行）

・ふと見知りたまひにけりと思せど、ほほ笑みて、なほあるを、よし　とも　あし　とも　かけたまはず。

（同蛍巻／同③・二〇八頁三行～五行）

・何ゆゑか世に数ならぬ身ひとつをうし　とも　思ひかなし　とも　聞く（同夕霧巻／同④・四八七頁一〇行～一一行）

・なほ、しばし隠させたまひて、巌の中に　とも　いかに　とも、思ひたまへめぐらしはべるほど、数にはべらずとも、思ほし放たず、何ごとをも教へさせたまへ

（同東屋巻／同⑥・五七頁二行～四行）

などの例と基本的に同じく、「AともBとも」の形で「対句並列の文章表現」を成り立たせる、程度のことには最低限想到すべきだったのではなかろうか。たったそれだけでも、要らぬ害をもたらす鼠、失礼、鼠説の出現は未然に防げたはずだからである。

【本文改訂案】

これまでの注釈書は、ことごとく無力であった。そこで提唱したいのは、「そ（曽）」→「か（可）」、「性」→「ね（禰）」、「法」→「す（須）」、「し（之）」→「み（三）」の誤写を想定してみてはどうか、そして、この人名転化は十分に起こりえたはずだ、という新たなアイデア。つまり、現存不審本文の祖形は「そ性法し」＝「素性法師」で、

◎「言はば言はなむ」と、**素性法師**が事を思ひたるにやとも

〔「謗るなら謗るがいい」と、（あの）素性法師の歌を（心に）思ったのだろうかとでも〕

だったとみるのである。『解環』が強調していたとおり、「言はば言はなむ」は素性法師歌の第二句でしかありえないのであり、清少納言ともあろう人が源兼澄の作と間違える道理がどこにあろうか。つまりは、現存本文の方がとんでもない誤写を孕んでいたというわけなのだ。

「これにて一件落着」と思うのだけれど、何せ、似非学者の直感である。そうは問屋が卸さない、かもしれない。はたして、諸賢の判定やいかに。是非ともご教示願いたいところだ。

【参考】

〔三巻本本文〕異同ナシ

〔能因本本文〕いはゝいはんとかねすみか事をおもひたるにやとも（学）いはゝいはむとかねすみかことを思ひたるに宿も（富）

十八

【本文】「関白殿、二月二十一日に、法興院の」の段・3

掃部司まゐりて、御格子まゐる。主殿の女官御きよめなどにまゐり果てて、起きさせたまへるに、花もなければ、「あなあさまし。あの花どもはいづちいぬるぞ」と仰せらる。（第二百六十段・三九九頁一一行～一四行）

【三巻本諸注の解釈】

△御清めなどに参りはてて／お掃除などをすつかりすましてから／▼参りはてて　とどこおりなく終つて（『評釈』本文／通釋／頭註）

△御きよめなどにまゐりはてて／主殿司の女官が御掃除などをすっかりすませてから、中宮が起き出されたが。（『大系』本文／頭注）

△御きよめなどにまゐりはてて／掃除などをすつかりすましてから（『全講』本文／文意）

×御きよめなどにまゐりはてて／お掃除に参上し、掃除が終わったころ（『旺文社文庫』本文／現代語訳）

△御きよめなどにまゐり果てて／お掃除などを終ってから／▼などに　能因本、前田本「などに」なし。従うべきに似る。（『角川文庫』本文／現代語訳／脚注）

△御きよめなどにまゐりはてて／お掃除なんかを奉仕し終わってから　（『解環』本文／口訳）
・御きよめなどに参りはてて　（『和泉古典叢書』本文）
△御きよめなどにまい(ゐ)りはてて／▼まい(ゐ)りはてて　すっかり周囲がきれいになってからである。　（『新大系』本文／脚注）
△お掃除などをすっかりおすませ申しあげてから　（『新全集』現代語訳）
×御きよめなどにまゐり、果て、／お掃除などに参上し、すっかり済ませて　（『全訳注』本文／現代語訳）
・御きよめなどにまゐり果てて　（『新編』本文）

【批評】

傍線部本文を正しく現代語訳するなら、「御清掃のために一人残らず参上し終わって」とでもなるはずだが、諸注を見渡すに、そのように解釈しているものはない。おそらく、「（朝の）お掃除をするために（清掃係が中宮の居所に）全員参上し終わった」→「中宮様がお目覚めあそばした」という文脈に違和感ないし多少の飛躍が感じられたため、「まゐり果てて」の部分を「お掃除などをすつかりすましてから」（『評釈』）、「お掃除なんかを奉仕し終わってから」（『解環』）などと解する趨勢に至ったのであろう。文章の連係としてはこちらの方が確かによい。

しかし、こうした訳文は「御きよめなどにまゐり果てて」ではなく「御きよめなど・まゐり果てて」の本文にこそ対応するものであり、現本文の解釈としては明らかな誤りなのである。そこで（かどうかは知らぬが）、「お掃除に参上し、掃除が終わったころ」（『旺文社文庫』）、「お掃除などに参上し、すっかり済ませて」（『全訳注』）などと、「まゐ

る」の語義を二重に訳出するという苦肉の策も一部で講じられているのだが、無論何の解決にもなっておらず、問題本文の抱える矛盾をかえって際立たせる結果となっている。

【本文改訂案】

錯誤を犯したその書写者は、この文脈を「主殿の女官」が「まゐり果てて」の意だと理解し、それまではどこにも存在しなかった目的を表す格助詞「に」を、うっかり「御きよめなど」のあとに書き足してしまった、というのが事の真相なのではあるまいか。そうだとすれば、衍字「に」は摘出されねばならず、傍線部の〝復元〟本文は、

◎御きよめなどまゐり果てて

〔（朝の）ご清掃などをすっかりして差し上げてから〕

となる。すると皮肉なことに、先に紹介した多数派の誤訳が、結果的には正しかったことになるのだからおもしろい。怪我の功名とはよくいったものである。

【参考】

〔三巻本本文〕異同ナシ

〔能因本本文〕御きよめ参はて、（学）御きよめまいり果て（富）